

1 問題意識

芸能人が認知症介護を公表するなど、今や認知症は国民的な関心事である。しかし、これだけ認知症が話題になってもその内容を正しく理解している人は多くない。認知症への知識や理解が足りないことから虐待に至ったり、独居の認知症高齢者が地域の不安材料となり、「施設へ入ってほしい」といった排除につながったりしている。

虐待通報後に事実確認のための訪問をすると、介護者からは認知症の人に対して「生き方が悪かったから、あのようになった」「家庭環境が悪いから」などと同情的に見たり、「性格が悪くなった。意地悪になった」という声が聞かれたり、「わざと嫌がらせをしている」と嫌悪したり、「恥ずかしい」「みっともない」と家に閉じこめたりする家庭もある。

「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」「個人として尊重される暮らし」を実現していくためには、専門職が専門職や市民向けに開く講座だけでなく、市民が市民に向けた市民のための普及啓発活動も重要である。

また、その対象を子どもへと拡大していくことで、地域力が高まり、大人も子どもも地域ぐるみで取り組む機運を高めていくことができる。専門職がいくらがんばったところで、24時間認知症高齢者を支えていくことはできない。ご近所力をいかに高めていくことができるか、地域資源のネットワーク化を実現できていくかで、介護が必要になったときの地域の暮らしやすさが変わってくるのではないだろうか。

2 取組内容

(人数等はいずれも平成21年12月末時点)

(1) 認知症キャラバンメイト養成講座(平成20年度・平成21年度 計81人)

キャラバンメイトは、医師、看護師、社会福祉士、介護サービス事業所職員、ケアマネジャー、民生委員・児童委員、元保育士など多様な経歴のみなさん。養成したキャラバンメイトに集まってもらい、連絡会を年3回程度開催。

(2) 認知症サポーター養成講座(平成20年度・平成21年度 計1,378人 ※うち409人は子ども)

平成20年度から取り組み始めた。老人クラブや見守り協力員、消防団、郵便局員、市職員などを対象として開催。5人以上の人が集まれば、出前講座を実施。

(3) 認知症キッズサポーター養成講座(平成20年度・平成21年度 計409人)

平成17年度から4年間、市と市社協による「夏休み・中高生3級ヘルパー養成講座」を開催。国が3級養成を終了したことから、21年度からは市も開催を取りやめた。

新たに小学5年生から中学3年生を対象として認知症を理解するための講座を開催。子ども達が理解しやすいようにキャラバンメイトやボランティアによる市民劇団を結成して寸劇を上演。小中学校の要請に応じて出前講座を実施したり、夏休みには地区の公民館を巡業して「夏休み！認知症キッズサポーター養成講座」を開催。

①実施までの経過

- ・ 志摩市ふくし総合支援室にて発案
- ↓
- ・ 志摩市教育委員会へ共催の打診。共催への了解を得る
- ↓
- ・ 受講生募集案内のチラシ作成・寸劇のシナリオ作成
- ↓
- ・ 志摩市中学校長会と志摩市小学校長会にて説明
- ↓
- ・ ふくし総合支援室職員が市内中学校を訪問し、開催日程の調整
(小学生は予定が少ないため、実施日にこだわらず)
- ↓
- ・ キャラバンメイト連絡会や民生委員児童委員協議会にて劇団員募集
↓ ※寸劇練習や小物準備
- ・ 認知症キッズサポーターの実施



②キッズサポーター養成講座の様子と参加した子ども感想

・はじめに（5分）

認知症のことで知っていることを子ども達に発表してもらった。
子どもたちから出た主な意見は次のとおり。

- | | |
|----------------------------------|-------------------------------------|
| <input type="radio"/> ばか | <input type="radio"/> わざと同じことばかり聞く。 |
| <input type="radio"/> 駐車場をまちがえる。 | <input type="radio"/> すぐにものを忘れる |

・認知症の劇（30分）

認知症高齢者（太郎さん、ウメさん）と周りの人達（家族、近所の人、お店の人）とのやりとりから、認知症高齢者に対する正しい対応を学ぶ。

・年をとることによるもの忘れと認知症による記憶障害の違い（10分）

出来事の細かい部分の一部を忘れてしまったり、人の名前が思い出せなかったりするものは、年をとることによるもの忘れ。認知症という病気になると出来事をすっぽり全部忘れ、そんなことがあったことすら忘れてしまい、また、家族でも誰なのかわからなくなることもあるということを学んだ。

他人事としてではなく、自分のこととしてとらえることを目的として『もし、自分が認知症になったら』ということで子ども達に考えてもらい意見を発表してもらった。子ども達から出た主な意見は次のとおり。

★家族の顔がわからなくなったら？

- | |
|--|
| <input type="radio"/> 悲しい。 |
| <input type="radio"/> 友達やいろんな人のことがわからなくなると不安になる。 |
| <input type="radio"/> おかしいなあと思う。 |

★給食を食べたのに忘れてしまったら？

- | | |
|---------------------------|---|
| <input type="radio"/> いや。 | <input type="radio"/> 心配。 |
| <input type="radio"/> 不安。 | <input type="radio"/> 認知症になってないからわからない。 |

★学校でトイレの場所がわからなくなったら？

- | |
|---|
| <input type="radio"/> 「どうしたの？」と声をかけてほしい。 |
| <input type="radio"/> 不安。友達が一緒に行ってくれれば安心。 |

★学校から帰る道がわからなくなって、家に帰れなくなったら？

- | |
|--|
| <input type="radio"/> こわい。 |
| <input type="radio"/> 周りの人が教えてくれると安心。 |
| <input type="radio"/> 泣く。だれかに道を教えてもらいたい。 |
| <input type="radio"/> 「一緒に帰ろう」と友達が言ってくれたら安心。 |

③認知症の人への接し方まとめ（5分）

認知症の人への対応の心得として“3つの” 『ない』（驚かせない、急がせない、傷つけない）があることを学んだ。

④感想・意見発表（5分）

今日の講座を受けてどうだったか、子ども達に感想や意見を聞きました。子ども達からの主な意見は次のとおり。

★認知症の勉強をして、友達や家族に教えてあげたいのはどんなことですか？

- 近所の人達から「近づかないように」と言われている人がいる。
今日のことをお母さんに話してあげる。
- 今日もらった本を友達に見せる。
- ゆっくり話すこと
- 何回も同じことを言ってきたり怒らせずに答えてあげるように言う。
- 認知症の人を嫌がらずに優しくすること
- 短い言葉で話すこと

★認知症の人に対してみんなができることは何かな？

- 認知症の人が困っていたら、優しく短い言葉で声をかける。
- 何回も「ご飯まだか？」と言ってきたら、ご飯を作ってあげる。
- 何回も聞かれたら、何回も答える。

- ◎道に迷っていたら？
- 声をかける。
- 「どこに行くんですか？」って声をかける。
- 一緒に探してあげる。
- 近所の人に聞いて一緒に探してあげる。
- 近くにいる人に聞いてあげる。
- 顔の見えるところまで行って、「どうしたんですか？」と聞く。
- 「どうしたんですか？」と声をかける。
- 家まで送っていく。

- ひいおじいちゃんが認知症で、今までは怒ったりしていたけど、これからは怒らないようにしたい。
- 身近な人が認知症になったら、今日の劇のようにしたい。



⑤キッズ見守り協力隊証の交付

講座の最後に、キッズサポーター養成講座を修了して、今後地域の見守り役になってもらうための証明として『キッズ見守り協力隊証』を子ども達に交付した。

一人ひとりが名前の入った証明書を受け取って、「うわっ、名前が入ってる。」「かっこいい。」と喜ぶとともに、「市長さんに任されたんや。」と地域の見守り役の一人であることを自覚していた。

3 キッズサポーター養成講座を修了した子ども達の地域活動

(1) 市立御座小学校の取り組み

ここ数年、子ども達は地域の公民館活動への参加や、ゲストティーチャーとして学校に招待するというかたちで高齢者とのふれあいを続けてきた。しかし、それは元気で比較的若い高齢者に限定されていた。

ところが、学校のお話集会に地域で活動されている「あんしん見守り協力員」を招待し、活動内容を聞かせてもらったことをきっかけに、あんしん見守り協力員と子ども達との独居高齢者世帯への訪問が始まった。学校で開催される祭の案内状を作って、一軒一軒配った。祭の当日、学校へ来てくれた高齢者もいた。

こうした高齢者宅への訪問は、公民館や小学校では出会えなかったこれまでよりも年齢の高い高齢者（70歳代、80歳代）や、これまでかかわりのなかった高齢者との交流に広がった。

そういった活動とともに、認知症キッズサポーター養成講座を学校として取り入れ、子ども達に芽生えた高齢者へのやさしい視線とボランティア活動の喜びを育み、学校教育の場から地域へと活動を広げている。

あんしん見守りネットワークの協力員活動を学校が知り、それが地域の独居高齢者宅への同行訪問につながり、そこで後期高齢者と接したことが認知症キッズサポーター養成講座へとつながった。現在、子ども達による地域ボランティア活動はますます活発に行われており、少子高齢化が進む志摩市にとって非常に心強い存在である。



(2) 市立安乗中学校保健委員会の取り組み

校区である安乗地区の独居高齢者世帯の訪問活動を、保健委員会の年間の活動計画に位置づけ、夏休みや冬休みを利用して取り組んだ。クッキーや蒸しパン、うちわや巾着、鉢植えの花など手作りのプレゼントを持って、地区の民生委員や社会福祉協議会職員と一緒に訪問するという形で取り組んだ。訪問の際に、黙ってしまい話を続けることができなくなってしまう生徒がいた。理由を聞くと、「おじいさんやおばあさんと何を話していいのかわからない」「どう接すればいいのかわからない」などの声が聞かれた。

そこで、訪問の事前学習として、高齢者に関わる全般的な学習とともに、認知症キッズサポーター養成講座を取り入れた。事前学習をしたことで、子ども達は訪問前に、「どんなふうに挨拶しようか」「どんな声かけをしようか」「大きな声でわかりやすい言葉で話をしないといけない」など、具体的にどうすればいいのかということ話し合うことができた。

実際の訪問では、恥ずかしがりやで消極的な子が、高齢者に対してはっきり大きな声で、「元気でお過ごしください」と言えたり、あたたかいお礼・感謝の言葉をもらい、「訪問してよかったなあ」という気持ちが子ども達に芽生えた様子を感じ取ることができた。

訪問の後、もし地震が起こったり、災害があったとき、「ここに一人暮らしの高齢者の人が住んでいるよ!!」と、自分達が大人に伝えることが大切だということも確認し合えた。地域の中で子ども達が何らかの役割を担っていける手応えが感じられた。

将来的には、昼間、仕事の関係で地域にいない大人にかわって、中学生である子ども達が地域の見守り隊としての一翼を担っていくことができるようになればと取り組みを進めている。



4 課題・提言

(1) 市民劇団の活動について

医療機関・介護老人保健施設・地域包括支援センター・介護支援専門員など、認知症にかかわる専門職はそれぞれが連携して、認知症ケアに取り組んでいる。

しかし、認知症の人が地域で尊厳ある暮らしを継続していくためには、そこで暮らす市民の理解と協力、支えが不可欠である。そうした中で市民が市民に対して認知症を正しく理解するための方法として寸劇上演を行っていることの意義は大きいと考える。現在、志摩市の市民劇団員は60人ほどいるが、人数が多ければ毎回出演する必要がなく自分の都合の良いときだけ参加できるためボランティアとしての負担感が少なくなる。また、市民劇団員は「介護者役や認知症高齢者役などいろいろな役を演じることで立場が変わるため、自分がその立場になったときにどのような気持ちになるかを疑似体験できた」と話している。

こうした劇を見た市民もまた認知症の中核症状や周辺症状をわかりやすく理解し、どのような対応をすれば良いかを学ぶことができる。そして、正しい知識を得た市民が家庭で伝えていくことで、地域における認知症理解が深まり対応の方法を理解した人たちによる手助けや声かけが広がっていく。

専門医や専門職による認知症研修会は、興味・関心のある参加者しか集まらないが、市民劇団は出前講座式なので学校でも老人クラブの会合でもどこへでも出かけていくため、より多くの市民に広く浅く知識をもってもらえることができる。こうしたやる気のある市民を発掘し、行政や地域包括支援センターがその活動を下支えていくことが重要ではないだろうか。

(2) 子どもたちは地域づくりの担い手

今後、少子高齢化が進む三重県では地域の福祉人材としていかに子ども達を育て活用していくかが重要な課題となっていくと思われるが、志摩市はすでに高齢化率が30%強にのぼるため、県よりも早くその課題に突き当たっている。

平成17年から2年間をかけて取り組んだ地域福祉計画の策定過程において結成された「こどもプロジェクト」(市と市社協主催の3級ヘルパー養成課程を修了した中高生の中で希望する子ども)では、メンバーの中高生から「私たちも企画されたものに参加するだけでなく、自分たちが企画して地域づくりに加わりたい」という声が聞かれた。また、中高生3級ヘルパー養成課程には50時間という講座時間数にもかかわらず多くの中高生が応募した。

今回、認知症キッズサポーター養成講座は福祉行政側から学校への積極的な働きかけによって実現した。子ども達は、大人が考えているよりも福祉に関心をもち、地域のために役に立ちたいという気持ちも持っている。そうしたことから、行政は学校や教育委員会、社会福祉協議会などと連携し、小中高校生が福祉に関わるきっかけを提供し、福祉への気づきを促していかなければならない。